

「聖母と呼ばないで・そして手をつなぐ育成会の役割」

一般社団法人栃木県手をつなぐ育成会 会長 小島 幸子

いつも栃木県の育成会を応援していただきありがとうございます
さて「あなたならこの（障害のある）お子さんを育てられると思って神様が授けられた」
時々ですが、私にこう言われる方がいます。その方にとっては最大の称賛なのでしょうが私は、苦笑いをしてしまいます。「自分はそんなに良い母ではないのになあ」と
周囲の「障害のある子どもの母は聖母である」という期待をプレッシャーに感じてしまいます

薄々は感じていた息子（31歳）の障害がわかったのは、3歳の誕生日を迎える少し前の秋でした

医師からの「知的障害、自閉症」の言葉に「時が止まる」という感覚を生まれて初めて体験しました。それから感覚統合訓練や言語療法を受けに病院に通ったのですが、歩くのをぐずる息子をよくおんぶして歩きました。病院のイチョウの木がきれいだったこと、空が青く美しかったこと。それに反して私の心は暗く悲しかったこと。昨日のことのよう思い出します。知的障害や自閉症を知らなかった私はこれからどんな風に育つのか？不安で不安でしかたありませんでした。それでも医師を始めとした医療スタッフや母子通園ホーム、保育園や特別支援学校の先生、そして友人たちに助けられて小さい頃の障害受容の苦しみから抜け出すことが出来ました

しかしほっとする間もなく、子どものライフステージに応じていろいろな困難にぶつかります。障害のある子どものことだけでなくきょうだいのこと、子育てを助けてくれた元気な親が弱くなって、介護が必要な状態になってしまったり、自分自身や家族の病気、近所付き合いや経済的なこと、仕事のことなど人によっていろいろです。子どもの障害も発達によってまた新たな課題が出て来たりもします

「お母さんなのだから、がんばらないと」という周囲の期待に振り回されてライフステージごとに押し寄せる悩みに母親自身が、押しつぶされてしまう心配があると思っています

私も会員のいろいろな悩みの相談を受けていますが、昔より福祉サービスが広がったとはいえ障害のある人を社会で支えていくしくみは、まだまだ整っていない厳しい現実があります。私たち育成会は「障害のある人が、どんなことで困っているのか」「それにはどんなサービスがあればいいのか？」「自分たちの地域にあったらいいなあ～と思うものは何か？」など社会的な支援の充実をみんなの力を合わせて働きかけていく。それが手をつなぐ育成会の役割だと思っています。どうぞよろしくお願いします